

京都大学	博士（教育学）	氏名	枝川 京子
論文題目	LGBT の子をもつ親の支援に関する臨床心理学的研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、LGBT の子からカミングアウトされた親を対象に、その心情を明らかにし、カウンセリングなど心理的支援の可能性を見出すことを目的としたものである。全体は、3 部構成でまとめられている。序章において、筆者の学生相談での臨床実践を踏まえた問題の所在と、研究の目的を明らかにした上で、第 1 部「研究の基盤と背景」において、研究レビューをまとめた。まず第 1 章では、LGBT 当事者が抱えるメンタルヘルス上の問題とその要因について探究し、第 2 章において、その問題に対する支援に焦点を当て、国内外の学術研究を概観し、取り組むべき課題を明確にすることを試みた。その結果、LGBT 当事者には環境調整が必要であり、そのひとつとして、親のセクシュアリティの理解や受容が考えられるが、海外では、心理臨床家による LGBT の子をもつ親に対する心理的支援の有効性が示されている一方で、本邦においては未だ心理的支援を扱った研究は些少であることが明示された。親が形成しているセクシュアリティに関する価値観は、時代や文化や宗教の影響を受ける。この親が形成した価値観や信念、伝統的な家族や文化的な価値観に固執することと、子どもを支持して受け入れることとの間で葛藤を抱えることも想定できる。親が自身とは異なるセクシュアリティを、理解する・しない、ないし受容する・しないの往来を繰り返す場合は、自分の考えや感情と向き合う場と時間が必要となる。このような視点から、LGBT の子どもをもつ親の経験と、そこに含まれる主観や意味を含有する語りの聴取の方法について先行研究から示唆を得て、面接調査研究を推進していくこととなった。 これらの背景を踏まえて、第 2 部「事例研究を中心とした探究」第 3 章第 1 節から第 4 節において、4 名の LGBT の子をもつ親との語りの生成に焦点を当てた面接調査研究を提示した。それを踏まえ第 5 節では、語ることは、自己と対話をすることで意識化されなかった思考や感情に気づき、整理される重要な行為であることを見出した。当事者と比して年長である親は、過去と現在の時間軸で自己を捉える機会が多く、過去を振り返りながら自己の語り直しを行っているため、語りの継続や集積によって、自己認識や自己変容が促進される。さらに第 4 章では、4 名の LGBT 当事者との語りの生成に焦点を当てた面接調査研究を提示した。これによって当事者が、自分のセクシュアリティについて語るプロセスから、「セクシュアリティが明確である自分」という確固とした枠組みが形成される。それは自分のアイデンティティをも肯定することにつながり、自分らしい生き方を確認することが明確になった。 第 5 章では、LGBT のうち、トランスジェンダーの子をもつ 2 名の親のナラティブを、ライフヒストリー法による分析を行い、子どものセクシュアリティを理解していくプロセスモデルの生成を試みる。ここから、子どものセクシュアリティについて違和感をもちながらも無意識に抑圧した出来事が、カミングアウトが契機となって想起され、意識化する過程が示された。続く第 6 章では、大学の学生相談室での LGBT の学生とその母親との面接過程を事例研究として提示し、その成果と課題を検討した。 第 2 部の事例研究を総括して第 3 部では、これら研究成果を踏まえた、LGBT の子をもつ親に対する心理的支援の解明を試みた。まず第 7 章第 1 節では、語る行為と語りの生成の意義、第 2 節では親がセクシュアリティを理解するプロセスから捉えた心理的支援をまとめ、第 3 節では、学生相談室における親面接の意義を論じた。親が子どものセクシュアリティを理解していくプロセスモデルは、心理臨床家が LGBT の親			

に対する個別相談やカウンセリングを行う際に援用できることも示している。一方で、学生相談という教育機関で相談を受けた場合、学生支援を主眼におき、そのサポート資源として、親と面接を行う立場は重要であり、その意義は子どものセクシュアリティを知って揺さぶられる価値観と、そこに生じる混乱と葛藤に心理臨床家が寄り添うことにあるとまとめている。第8章では最初の問いに戻って、心理臨床家によるLGBT当事者の子をもつ親への心理的支援とはいかなるものかを考察した。第1節での親に必要な支援と、対象喪失からみた親の心情の理解と支援、第2節におけるLGBT当事者への心理的支援、そして第3節において、心理臨床家によるLGBT支援について具体的な提唱をおこなった。

そして終章では、本研究の理論的・実践的な貢献と研究の限界、今後の課題と展望について論じることで、本論文は締めくくられている。

(論文審査の結果の要旨)

LGBT、セクシャルマイノリティの問題を抱えた人びとへの理解は、世界的に拡がりをみせている。またこのことが、理解の輪を拡げているのと同時に、自分自身の性自認に対して疑問を抱く青年たちも増加してきている。心理臨床実践における、からだところの問題を抱えた人びとへの支援は、医療領域のみならず、教育領域で重要性を持っている。本論文は、著者の長年の学生相談臨床活動において、LGBT 当事者とのかかわりを持ってきた経験から歩みが始められた。しかし、その当事者研究は、すでに心理臨床の領域のみならず、医学的、社会学的にも多岐にわたり成果を発表されてきている。そうした背景も熟考した上で、本論文の著者は、LGBT の子を持つ親にいかにして支援をしていくかという問いを立て、多角的なアプローチと考察を行っていった。経験の積み重ねからくる、入念な検討の上での問いは、現代の青年を取り巻く環境としての親たちにとって、また社会に向けて、意義のある研究となっていると評価できる。

第 1 部でまとめられた当事者のメンタルヘルス上の問題の要因とその支援は、国内外の緻密な先行研究レビューによってまとめられている。セクシュアリティという用語の定義も現代では非常に複雑になっている。それは文字通りその数だけ方向性や現れの違いがあると理解できる。ここで、マイノリティストレスがもたらすメンタルヘルス上の問題について見出し、さらに本論文で対象とする青年たちの支援にまつわる環境としての親たちへのアプローチはいかになされているか、入念な検討がなされている。親が自身とは異なるセクシュアリティを持つ子どもを理解する・受容するプロセス、あるいはそれができない在り様については、本邦での包括的な研究は乏しく、大きな課題となっている。まずこの問題設定までのプロセスにおいて、本論文の価値を見出すことができる。次に、これを実践研究としてまとめていく、本論文の独創的なアプローチに対しても高く評価できる。

とりわけ学生相談という教育領域での心理臨床実践において、親へのアプローチはいかにしえるかという大きな壁が存在する。本論文では、「事例研究を中心とした探究」として、まず調査面接的なアプローチによって、協力者を得て、その「語りの分析」を丁寧に積み重ねていくことから始められている。そこでは、調査面接でありながら、心理臨床的な語りの聴き方、応答によって、親たちが、自己との対話をすることで、意識化されなかった思考や感情に気づいていくプロセスが描かれている。ある意味、基礎的なアプローチによって、著者自身が、LGBT ということについて、身近に感じ取り、理解をしていくことがいかに困難であるかを気づいていくプロセスでもある。この真摯な眼差しを持った複数回の面接によって、親たちはここを開いていく。その技法というべき聴き方、流れの促しにも、臨床心理学的研究としての大きな価値を見出すことができる。

第 5 章、第 6 章へと事例研究は進められていくが、どうしてもトランスジェンダーについて理解ができない親とも対峙せざるをえない。それでも、当事者個人としての生き方に尊厳をもっていこうとする構えが示され、面接の目標は、理解と受容のみではないことにも気づいていく。仮説検証的に論を進めていくなれば、こうした事例は取り上げられにくいものとなる。しかし、本論文の心理臨床実践は、これが現状であることを親自身のなまの感情に寄り添い、その混乱を理解していくことで、親への支援の重要性を提示しているのである。

こうして第 3 部の総合考察では、LGBT の子をもつ親への心理的支援の方法として、ナラティブ共同生成に基づいた個別相談やカウンセリング援用の必要性は高いことを結論づけ、彼らの新たな語りを育む心理臨床家の役割の重要視を示している。親自身が、LGBT に関する理解を示していくことは、対象喪失にも繋がるという見解

も示しながら、そのためにも親自身の人生経験の重さや意味に尊厳を抱き、決して理解の押しつけではない、聴き手、語り手の役割を果たしていく大きな意味を見出していることに、本論文の価値の高さを認識することができる。

試問では、長年にわたる心理臨床実践に基づいた丁寧な論考であり、深い検討と考察の積み重ねがなされていることについて、いずれの調査委員からも高評価を得た。その上で「LGBT」というある意味社会で大きく取り上げられる、こころとからだの問題にかかわる研究として、その背景にある周囲からの無理解がもたらす恐怖や不安という内的な問題にどのように迫っていけるかについて議論がなされた。加えて、本論文の目指した調査面接が、心理臨床的意義を持つものである一方で、それが社会学でのものとは技法上の違いがどのようにあるべきかなど、本論文で見出された知見の汎用性をめざすステップについて、極めてレヴェルの高い意義深い討論が行われた。これらの議論は、本論文の価値を損なうものではなく、むしろ、今後の著者のさらなる臨床実践活動、指導者としての活動に重要な視点をもたらすものであり、心理臨床家が経験を積み重ねながらもなお、熟考していくべきプロセスと思われた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降